

中等教育研究開発室年報 第 36 号（2023 年 3 月 31 日発行）別冊電子版
2022 年度 授業実践事例

国語科 高等学校第 I 学年

兼好にせまる

『徒然草』「花は盛りに」 「精選言語文化」（明治書院）使用

授業者 田中 直子

（教育研究大会 公開授業）

広島大学附属中・高等学校

高等学校 国語科 学習指導案

指導者 田中 直子

日 時	令和4年11月26日(土) 第1限 9:30~10:20
場 所	第4研修室
学年・組	高等学校I年3組40名
単 元	兼好にせまる 『徒然草』「花は盛りに」 「精選言語文化」(明治書院)使用
目 標	1. 古典の世界に親しむために、作品や文章の歴史的・文化的背景などを理解することができる。(知識及び技能(2)イ) 2. 作品や文章に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、内容を解釈することができる。(思考力、判断力、表現力等B(1)イ) 3. 言葉がもつ価値への認識を深めるとともに、生涯にわたって読書に親しみ自己を向上させ、我が国の言語文化の担い手としての自覚を持ち、言葉を通して他者や社会に関わろうとする態度を養おうとする。(学びに向かう力、人間性等)

指導計画(全8時間)

- 第一次 初読の問い(資料①Ⅰ)を立て、その問いを中心に読解する。 3時間
第二次 百三十七段全文を読んでからの問い(資料①Ⅱ)を整理し探究する。 3時間
第三次 探究する問い(資料①Ⅲ)についての解釈を発表する。 2時間(本時 8/8)

授業について

これまで現代文においては、「問いづくり」を行うことで学習への動機付けとすると共に、自ら立てた「問い」に向き合うことを通してより深く考えることを目指してきた。優れた問いとはどのようなものかということについては引き続き考えていかなければならないが、学習者が主体的に教材に関わっていくことにおいては「問いづくり」は有効な手段であると考え。今回は古文においても問いづくりを行い自らがその問いの答えを探すことで、より深く筆者の考え方に迫ることができないかと考えた。

兼好法師によって書かれた『徒然草』は「枕草子」「方丈記」とともに「三大随筆」に数えられており、古来より名文とされている。兼好の生きた時代は鎌倉幕府の滅亡、後醍醐天皇の親政、南北朝の両統並立等混乱を極めた時代であった。王朝文化に対する憧れを持ちつつも、出家して自由な立場となった兼好が京都と鎌倉、貴族と武士の間を行き来しながら、動乱の世を見つめ社会や人について書いたのが二百四十三段からなる『徒然草』である。その根底を貫く無常観は高校生からは一見縁遠いものと感じられるかもしれないが、変化の激しい現代を生きる生徒にも従来のものの見方にとらわれず軽やかでありながらも本質をとらえようとする兼好の姿勢には感じるものがあると考え。

百三十七段「花は盛りに」は『徒然草』下巻の巻頭を飾る最も長い章段である。また兼好の考え方が色濃く出ている重要な章段であるといえる。教科書に掲載されているのは一部分ではあるが、兼好のものの見方、感じ方、考え方を捉えるには適した教材であると言える。その文章は一般論に対する筆者の主張が述べられるなど評論に近い形が読みとれる。一方では前半部分が「見る対象」について述べられているのに対して、後半では「対象の感じ方」について述べられているなどその論点は緩やかに変化しており一読しただけでは筆者の考え方をつかむことは難しい。そこに表現されている無常観の上に立脚している現象にとらわれることなく物事の本質を見つめようとする兼好の意識に、反語表現や係り結び・対比などに着目させることを手掛かりにさせて

まっていきたい。

自分たちの立てた問いに対する答えを探る中で探究的な活動も必要になってくる。初読の問いを中心に読解を行い、解決できなかった問いの答えを探す活動へと展開し、またそれを共有することで生徒の思考が循環する仕組みとしないかと考えている。解決できなかった問いこそが兼好の考えに迫る「深い問い」となるのではないかと考えて授業を構想した。

題 目 兼好にせまる

本時の目標

1. 「花は盛りに」に表現された兼好の考え方を捉え、内容を解釈する。
(思考力、判断力、表現力等 (1) イ)
2. 自分たちの解釈を他者へ伝えようとする。
(学びに向かう力、人間性等)

本時の評価規準 (観点/方法)

1. 「花は盛りに」に表現された兼好の考え方を捉え、内容を解釈している。
(思考・判断・表現等/発表・資料)
2. 自分たちの解釈を他者へ伝えようとしている。
(主体的に学習に取り組む態度/発表・ワークシート)

本時の学習指導過程

学習内容	指導上の留意点	評価の観点と方法
〈導入〉 前時の振り返りと本時の学習活動の確認をする。 〈展開 1〉 問いに対する自分たちの答えを発表する。 発信する 比較する 〈展開 2〉 兼好の考えについてまとめる。 まとめる 〈まとめ〉 振り返りについて確認する。	前時発表したグループの論点を整理する。 グループで考えた問いについての解釈を発表させる。 発表後に質疑応答をさせる。 各グループから出てきた考察を元に、全体で兼好の考えについて共有させる。 Google クラスルームを使い振り返りを記入することを伝える。	自分たちの解釈を他者へ伝えようとしている。 【主体的に学習に取り組む態度】 (発表・資料) 兼好の考え方を捉え、内容を解釈している。 【思考, 判断, 表現】(発表)

実践上の留意点

1. 授業説明

「問い」に対する探究活動を設定する中で、生徒が本文以外のどんな文を読めば自らの問いに対する答えの手立てとすることができるかということを考えた。『徒然草』百三十七段「花は盛りに」は多くの教科書に掲載の定番教材であるが、ほとんどが前半部分のみを掲載している。この部分だけを読んで兼好の考え方を理解することは難しい文章である。そこで後半部分を読むことにより、兼好がこの文章を通して伝えたかったことが見えてくるのではないかと思い授業を計画した。

百三十七段前半部分は月と花を例に挙げながら一般的なものの見方に対して、兼好が好ましいと考える物事の捉え方や美意識が提示されている。ここで挙げられている花や月は平安の王朝文化において多く用いられた対象物である。一方後半部分の最初に取り上げられる祭りというのはより広い層に親しみのあるもので兼好独自の視点がみてとれる。祭りがでてくることにより始めから終わりまでの全てが大事であるという兼好の思想が、体育祭や文化祭を経験した生徒にはより実感をもって理解できるのではないかと考えた。また死について書かれた部分を読むことで、自然や人事をどう捉えるか、つまりどう生きるべきかということが表現された文章であることに気づくことを狙った。

当初前半部分の読解や兼好の考え方を理解するのが難しいと捉えている生徒が多かったが、自分たちで設定した問いに対する答えを探究していく作業にすすむと積極的に取り組む姿勢が見られた。兼好の人生に迫る班、当時の政治的な混乱から兼好の文を読み解こうとする班、また他の段を読むことで『徒然草』を理解しようとする班もあった。百三十七段の本文から離れてしまうことは授業者の意図ではなかったため本文の中に自分たちの考察の根拠を求めるよう促したが、多様な視点から1つのテキストに迫ろうという取り組みを通して生徒は新たな学習の方法を手に入れたように思う。研究授業ではまず探究する問い（資料①Ⅲ）のBを担当した2グループ、Cを担当した4グループの合計6グループがポスター（資料②）を使い発表した。その後全体で生徒の考察をとりいれながら百三十七段を概観し兼好の思想についてまとめるということを試みたが、うまく生徒の発表をふまえたものとするができなかった。生徒の振り返りでは「1つの古文に対してここまで深く掘り下げて考えたのは初めてだったので新鮮で面白かった」「論文や他者の考察に触れることでより自分の理解が深まった」という感想が見られた一方で、後半部分については丁寧に読み込むことができていない班も多く見受けられどう扱うべきであったかという課題が残った。また今回の単元については実質10時間を費やしており、古文において問いをたて自分たちで考察を導き出すという授業をしようと思うとかなり多くの時間を割く必要があることがわかった。新課程になり「言語文化」における古文の時間が実質減っていることを考えると、このような実践にどう取り組んでいくか考えていく必要がある。

2. 研究協議

研究協議では、まず発表についてご指摘があった。今回は発表後に質疑の時間をとったもののほとんど質問はでなかった。他班からの質問を想定すると自分たちの考察をより研ぎ澄まされたものにする必要が出てくるが、そこを狙って質問のさせ方・発表のさせ方をもっと工夫するべきではなかったかというご指摘であった。確かに自分たちの班の発表だけではなく他班の発表についてしっかりと考えることで、より広く深く思考することを促す仕掛けを作るべきであった。また授業者のファシリテーションの力が足りず生徒の発表をいかしたまとめができなかったことが残念である。

続いてICTを使った授業はどうしても「開いていく授業」になりがちなので、授業をいかに収束させていくかという点が必要であるというご助言を頂いた。具体的には文章を書くことで自分たちの問いと考察について再度深く考えることができるのでは、という提案であった。書くことによって初発の問いから自分自身の考えがどのように変容したかを自覚することができるといえる。つまりテキストとどのように対話し深く思考することができたかを確認することになる。本時の後に振り返りは行ったが、やはり最後に個人がテキストと向き合う時間をとるべきであったと思う。

資料①

徒然草「花は盛りに」 問いづくり

I 初読の問い

- ① 初め終わりこそをかしけれ、とあるがなぜ初めと終わりなのか
- ② 昔の恋人との思い出を引きずることが恋の情緒と言えるのか
- ③ 兼好がこの考えに至ったのはどのような生き方をしてきたからなのか
- ④ 話に出てくる例で植物関係が多いのはなぜか
- ⑤ 自然と人間を結びつけるのはなぜか
- ⑥ 兼好法師の伝えたかった「教訓」はなにか
- ⑦ なぜこのような段落構成なのか
- ⑧ 片田舎の人が枝を折った理由
- ⑨ 何を目的として兼好はこの随筆を書いたのか
- ⑩ 係り結びと反語を用いた表現が多いがどのような意図があるのか

II 百三十七段全文を読んだからの問い

- ① 前半の「さやうの人」を批判するような文章は後半の人の死期について述べている文章とどのような関わりがあるのか
- ② 前半の情緒がわからない人と後半の武士との関係
- ③ 唐突に死生観について書かれているのはなぜか
- ④ 初め終わりがあはれなら「死」はあはれなのか
- ⑤ 前半の花や月の内容は「死」とどのような関係なのか
- ⑥ なぜ花、月、恋、祭から死へと続く構成なのか
- ⑦ 前半に語った内容は、結論にどうつながるのか
- ⑧ 祭りのところまでの話とその先の死の話との関係はどうなっているのか
- ⑨ 筆者が死と向き合っているのはなぜか
- ⑩ 子供のように楽しむことは劣っていると考えていたのか

III 探究する問い

- A 前半の花や月の内容と後半の死についての文章はどのような繋がりがあるのか
- B なぜ初めと終わりなのか
- C 兼好が伝えたかったことはなにか

～前半の証や月の内容と後半の死についての文章はどのようなつながりがあるのか。～
 私たちは前半と後半の内容の根底を兼好独自の無常感があると考えた。

徒然草が書かれた時代背景
 鎌倉時代の末期で武士による政治にひずみが生じ、崩れ去ろうとする時代。

兼好の生き方
 隠遁者。仏教のどの宗派にも属さず自由気ままに生きる。

前半

・花恋月 → 消滅・流転する常に移り変わるもの
 → 無常

(兼好の主張)

一つの見方に囚われることなく、常識的に美しいとされる瞬間以外にも趣を感じるのがよい。

後半

・人 → 生まれて死ぬもの
 → 無常

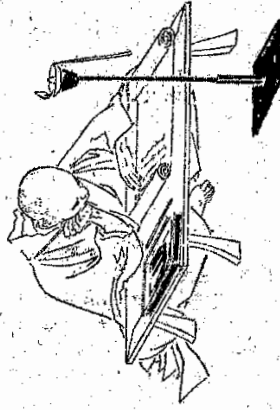
(兼好の主張)

常に無常に迫られた命だからこそ生きている今が美しい。限りある時間を味わい楽しむべきだ。



参考文献 「徒然草」に見る兼好の無常観についての一考察

2班



なぜ兼好は初めと終わりが風情と考えたのか

1班

1. 予想

- ① 始まりの期待感と終わりのしんみりとした余韻に情緒を感じた
- ② 最も盛っている時点を「想う」ことを良しと考えた

2. 兼好の世界観とその由来

- ・ 無常観：一切は無常であるとする、ものの見方
- ・ 批評精神：いかなる命題も、自らその命題の価値を検討することなしには決して受け入れない精神
- ・ 尚古主義：古い時代の文物、制度などを尊び、これを模範としてならおうとする考え。

→ 今盛っているものより、移り変わり流れてゆくものを語っていた？

思想の元…… 古今和歌集や枕草子を中心とした平安文化(感情をあらわにしない、屈折のある表現、反語)

3. 結論

私たちの予想

兼好が生きた時代では一般に盛っている時期をよとする風習があったが、平安時代の文学に影響を受けた兼好は、あらゆる物事は流れて変化し続けていくものだと考えたため、だからその初めと終わりにこそ情緒があると記した。

跡見学園女子大文学部紀要『徒然草』研究 ―兼好の思想の由来―、角川ソフィア文庫 新版 徒然草 訳：小川剛生、資料集

兼好が『徒然草』第137段で伝えたかったことは何か

「7班
名村 雑部 伊達 山中

1. 無常観の考え

「すべてのものは絶えず変化していくものである」という仏教思想

2. 『徒然草』第40段での兼好の台詞

「我らが生死の到来、ただ今にもやあらん。それを忘れて、もの見て日を暮す、愚かなることとはなほまざりたるものを」

(噛み砕いた)現代語訳：

私たちが死ぬのは今かもしれないのに、それを忘れて競馬に時間を費やしているのは木の上で居眠りしている法師よりもずっと愚かだなあ

3. 考察

前半で説明されていた月や花、恋、祭などは絶えず変化していくものの一例(無常観)
絶えず変化していくからこそ、どこが一番盛り上がるかというより始めから終わりまで見ることを勧めているのではないか
最後に兼好が伝えたかったのは、人生というものもあっけなく最期を迎えるのではなく気持ちを整えたうえで死に向かうべきだということなのではないか